

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F-6(漆工)に展示されている「黒漆楼閣人物螺鈿食籠」について勉強してみよう。

きらきら光る貝でかざった 重箱のお話



図1 黒漆楼閣人物螺鈿食籠
中国 元時代 14世紀 個人蔵

みなさんは、海辺で貝がらを拾ったことがありますか？貝がらの内側はすべすべしていますね。種類によっては、そのすべすべした部分が虹色にかがやくものがあります。上等なおすし屋さんでみかけるアワビや、南の島でよく食べるヤコウガイなどがその代表です。このきらきらがやく部分をかざりに使った工芸品「螺鈿」が今回の主役です。

貝のかがやきを利用した工芸品は、世界各地にあります。中国、朝鮮、琉球（沖縄の昔の名前です）、日本などの東アジアでは、螺鈿が漆工芸とともに発達しました。漆工芸とは、漆の木からとれる樹液を器の表面にぬって、コーティングしたり、接着剤として使ったりする工芸です。螺鈿といっしょに使うときは、貝のかがやきが引き立つように、漆に黒い色をつけるのがふつうでした。

中国の螺鈿は、たいへん古くから作られてきました。元時代の（西暦1271年～1368年）の螺

鈿が有名です。

元時代の螺鈿は、うすくけずった貝を、文様の形に切って器に貼ったり、細かくきざんで文様の形にならべたりします。器の表面に貝をはったら、その貝がすっかり見えなくなるまで黒漆をぬり、そのあとで貝の上にぬった漆を刃ものでペリペリとはがします。これはとても手間のかかる仕事です。絵の周りには、小さな円、六角形、ひし形、花形、格子などを描いて地文様（背景の文様）としました。地文様というかわき役のようですが、同じ形をくり返す文様は、少しでもずれると、とても気になります。これがきちんとできていないと、全体の印象がすっかり変わってしまうので、とても重要なかざりなのです。

写真の作品（図1）は、元時代のものと考えられている、食べ物を入れる器です。花びらが8まいある花のような形の器が4だん重なって、いちばん上にふたをしています。

このなかには、どんなごちそうが入っていたのでしょうかね。

ふた（図2・3）に描かれているのは、宮殿の女性たち、馬にのる男性たち、そしてお付きの若者たちです。馬のあしや橋の下を流れる水の形は、貝を正確に切ってつくっていますね。馬のまつげや橋に描かれたうさぎは、貝の表面に毛のように細い線をほって描いています。見えますか。

注目は、この画面の外がわの地文様です。（図4）輪を重ねた文様の中に、ダイヤモンド形の貝をならべてつくった小さな花が見えます。この地文様のまんなかには花形のわくを設け、その中に3種類のことなる花をつないだ唐草文様を描いています。とても細かな細工なので、じっと見ていると頭がクラクラします。この地文様は、各だんで文様がことなりますが、ふたと一番下の器だけは同じ文様です。

さて、中間の3だんには、花形のわくのなかに色々な人物が描かれています。3だんに8面ずつなので、24まいの絵があります。描かれているのは、中国で昔から語りつがれてきた、24人の親孝行の物語（「二十四孝」）です。

次の3つの話がどこに描かれているか、さがしてみてください。1. 両親は自分にやさしくしてくれないけれど、男の子はその両親のためにいっしょうけんめい畑仕事をしました。すると、ゾウがあらわれて畑を耕してくれました。2. 父親とでかけた先でトラにおそわれた男の子が「ぼくを食べて！その代わり、お父さんを見のがして！」と願ったところ、トラは何もせず去って行きました。3. 母親がきれいな水とおいしい魚をほしがるので、いつも遠くまで歩いて行って、水をくんだり魚をつったりしていた息子とその奥さんの家のそばに、きれいな水がわき、川となって、毎朝、コイが泳ぐようになりました。どうでしょう。みつかりましたか？



図4 地文様と花唐草



上：図2 ふたの絵

下：図3 ふたに描かれた馬に乗るおじさんたち

こんなに細かくてきれいな螺鈿は、朝鮮、琉球、日本人たちにとってあこがれの的でした。それぞれの国が、中国をお手本にして、自分たちの螺鈿を作りました。展示室にたくさんならんでいますので、見くらべて楽しんでくださいね。

（工芸室 永島 明子）